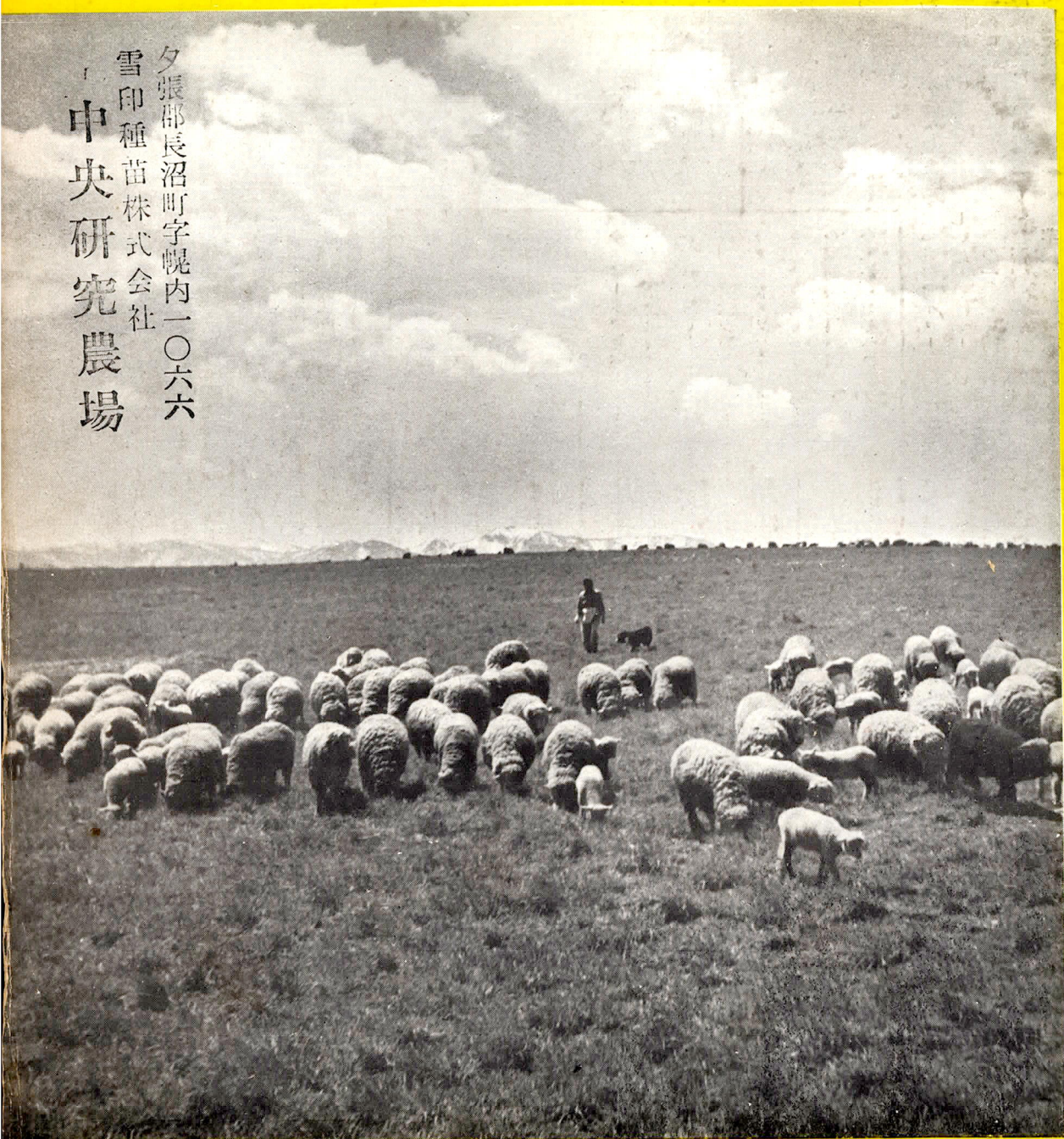


藝園草牧

第一卷・第九號

昭和二十八年十一月一日（每月一回）發行

夕張部長沼町字幌内一〇六六
雪印種苗株式會社
中央研究農場



農村の明るい窓

牧草と園芸は暗雲低迷の日本農業に明るい窓を開くものであるから、府県の農村の新しい歩みを覗いて来いと先輩から奨められ、二、三県を見聞して、学ぶところが多かつた。

○〇堤防酪農組合 N市の近郊に幾つかの酪農組合がある。堤防の草を主な飼料資源として生まれた組合で、牛乳を搾る前に「まず草を作れ」と県庁から指導をうけ、堤防の牧草化を熱心に行つてゐる部落を訪ね。広い幅の、高い堤防が牧草に包まれて、遠く長く横たわつてゐるのを見て驚いた。

九月末から十月初に反当りオーチャードグラス五ポンド、イタリアンライグラス二ポンド、トールオートグラス二ポンド、赤クロバー一ポンドほどの種子を混播し、肥料は反当り硫酸十貫、過燐酸五貫ぐらいを撒布した後を、レキや竹箒で堤防面をガリガリと掻き、学童の応援を得てオイチニ、オイチニと満遍なく踏みつけ、種子を落着かせておくと、秋雨の湿りを受けて発芽し、翌年はごらんの通り堤防一面が牧草に変わり、その刈取量は一躍三〜四倍になるという。当初は、堤防に肥料や種子を蒔けるものか」と農民は耳をかさなかつたが、県庁の熱意と適切な技術指導は農民をビックリさせ、こんなことなら早くやればよかつたということになり、今秋この県に私の会社から一五トン車で牧草種子を送り届けるまでになつたわけである。

聞くとところによると、この組合は昨秋五十頭の乳牛を導入するときに、各戸主人も夫人も連帯調印の熱心さで組合をつくり、この春は牧草の伸びるように仔牛が次々と産まれ、今は主人よりも夫人達の熱がはるかに高いとのことである。また堤防の草が牛乳に化けるばかりでなく、刈草量に比例して堆肥の量が増産されて、白菜や大根も太り、米

の収穫もめきめき上つたという、まことに喜ばしい明るい事例である。

水田酪農 東北地方のいわゆる水田単作地帯のこの盆地は、黄金の波一色であつた。その間を縫う部落には、小形ではあるがキング式の赤い牛舎が点々と見え、その片側に

牧草と園芸 十二月號

目次

◇表紙写真……牧舎にかえる

北海道農試畜産部（月寒）にて

◇農村の明るい窓……五十嵐 清

◇スイートクロバー……中野 富雄……一

◇くるみの栽培について……三

◇牧草で画く……なかの……五

◇菊の用途のいろいろ……原 秀雄……六

◇クレオメソウ……雪印種苗上野幌育種場……七

◇短命な花と長命な花……八

◇玉蜀黍の黒穂病……八

◇秋から初冬へのバラの手入……九

は小さなサイローが一基、二基と寄り添う情景も、何か新しい感じを漂わしている。

その一農家を訪ねると、乳牛二頭と豚四頭を飼つてゐた。畜舎の裏手は、田圃を二反ほど畑に還元して、桃と梨と華果を終戦後植へ出したというが、植付けて五年目のリ

ングの新種「陸奥」が子供の頭ぐらいの巨大果をものみごとに付けていた。下作は芝生のようにラデノクロバーが繁り、三週間毎に刈取つて飼料としてゐる。水田は早稲を刈れば、直ちに稲架にかけ、跡地を自動耕耘機で反転し、五〜六尺の幅広の畦をつくり、クリムソンクロバーとイタリアンライグラスの混播したものは二寸ぐらいに青々と伸びており、ライ麦とベッチの混播したところはライ麦が針を植えたように芽出ししていた。その日も秋晴れの下でリズムカルな動力の響も軽やかに耕耘整地の最中で、紫カブとレープを蒔く準備に忙しそうであつた。

主人曰く、畑がないから飼料生産ができぬと言う人々は、水田裏作に飼料を栽培することを知らぬのか、知つても作る気がないが、どちらかであらう。この地帯で、水田面積の半分に早稲を作り、その裏作に牧草や根菜を栽培すれば、有畜農業が立派に成り立ち、地力の増進もまた容易にできる。

私の家の畦畔と農道も見て下さい、と自慢顔に案内されたが、さすがに畦という畦はみなラデノクロバーになつており、農道や水路の堤塘はオーチャードグラスやチモシーが雑草を征服して天下をとるの概を示している。

右の二つの事例から考えるのに、春、秋の村祭には、どの鎮守の森にも「五穀豊穡国家安全」の大旗が翻り、春の祈念にも秋の感謝にも五穀の豊かな稔を念じたものであつて、これが農業の姿であつた。戦後、農民、農村が生きるために水田と園芸と酪農との有機的結合と繁栄とを研究し、着々実施され、水田にも果樹園にも路傍堤塘にも草科牧草を植えて遊離窒素を固定し、蛋白食糧化するということ、各種の特性をもつ禾本科牧草を植えて有機質源とするなど、草を作つて食糧の増産と地力増進に役立たせ、日本民族の食糧問題を解決するという強い息吹を感じるのである。これこそ日本農村の「明るい窓」と私は思う。